平成29年度　第２回練馬区総合教育会議

開会年月日：平成29年11月14日（火）

場　　所：練馬区役所西庁舎９階「９－１会議室」

出　席　者：練馬区長　　前川　燿男

教育委員会　教育長　　河口　　浩

同　　委　員　　坂口　節子

同　　委　員　　安藏　誠市

同　　委　員　　外松　和子

同　　委　員　　長島　良介

議　　題：

１　たくましく生きていく子どもたちの育成について

２　その他

開　　会：午前10時00分

閉　　会：午前11時40分

説明のため出席した者の職および氏名

総務部長	小西　將雄
教育振興部長	大羽　康弘
こども家庭部長	堀　　和夫
（総務部）	
総務課長	大木　裕子
（教育振興部）	
教育総務課長	櫻井　和之
教育施策課長	中島　祐二
学務課長	山﨑　泰
施設給食課長	竹内　康雄
教育指導課長	芝田　智昭
副参事（教育政策特命担当）	齋藤　健一
学校教育支援センター所長	清水　優子
光が丘図書館長	桑原　修
（こども家庭部）	
子育て支援課長	鳥井　一弥

こども施策企画課長	橋間　亮二
保育課長	三浦　康彰
保育計画調整課長	近野　建一
青少年課長	加藤　信良
練馬子ども家庭支援センター所長	宮原　惠子

【前川区長】
それでは、定刻になりましたので、平成29年度第２回総合教育会議を開催いたします。
本日は、傍聴の方がお一人いるようですので、ご報告をいたします。
それでは、お手元の次第に沿って進めさせていただきます。本日の議題は、「たくましく生きていく子どもたちの育成について」というものです。この議題につきましては、昨年策定いたしました、練馬区教育・子育て大綱に「夢や目標を持ち困難を乗り越える力を備える子どもたちの育成」を目標として掲げておりますので、その具体的な内容というのはどのようなことか、現在、いろいろな区の組織が行っている取組や課題を踏まえ、その実現に向けて、今後どう進めていこうかという趣旨です。どうかよろしくお願いいたします。
子育てそのもの、教育そのものの問題ですから、いろんなご意見があると思います。忌憚のないご意見をいただいて、活発な議論ができればと思っております。
それでは、お手元に資料の１を用意してありますので、まずその説明から始めさせていただきます。事務局、お願いいたします。

【芝田教育指導課長】
それでは、資料１をお願いいたします。
この資料１の構成は２部構成になっております。１つが、１ページの「Ⅰ　各種調査（29年度実施）から見える児童生徒の実態」、もう一つが、８ページ以降の「Ⅱ子どもたちが「生きる力」を身に付ける場や環境」です。
最初に、調査から見える児童生徒の実態についてご説明をいたします。調査等の概要ですが、対象は、今年度の小学校６年生と中学校３年生です。対象となる調査は、４月に実施いたしました全国学力・学習状況調査、原則６月に実施しております、全国体力・運動能力調査です。３つの調査の主な調査事項を１ページの表でご説明をしております。
２ページ目は学力調査の結果です。これにつきましては、小学校、中学校とも良好な状況にあります。小学校は国語Ａ・Ｂ、算数Ａ・Ｂとありますが、Ａが基礎的な問題、Ｂが活用にかかわる問題です。中学校についても国語・数学、Ａ・Ｂそれぞれありますが、基本と活用となっています。数学Ｂのみが、都の平均と同等の数値となっておりますが、ほかは１ポイント、あるいは２ポイント上回っているという状況です。
３ページからが学習状況・意識調査をまとめたものです。幾つかある中から、たくましく生きていく子どもとかかわりがあると思われる６つの設問を抽出しております。
１つ目の設問は、「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがありますか」です。これは、いわゆる達成感にかかわる質問ですけれども、これについ

ては、「当てはまる」、あるいは「どちらかといえば当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒が小中学校とも90％を超えております。

（２）は「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか」という設問です。これはチャレンジシップにかかわるところですが、小学校６年生は、都と比較してほぼ同等です。中学校３年生については、都と比較すると若干「当てはまる」と回答した生徒が少なくなっています。

４ページの（３）「自分には、よいところがあると思いますか」は、自己肯定感にかかわる設問ですが、小学校６年生については、「当てはまる」と回答した児童が、都また国を下回るという結果です。中学校についても同様で、都も国も下回る結果になっています。

（４）「将来の夢や目標を持っていますか」は、将来の展望にかかわる設問になりますけれども、小中学校とも都と国、ほぼ同等の結果となっています。

５ページをお願いいたします。（５）「今住んでいる地域の行事に参加していますか」は、社会参画にかかわる設問です。これについては、小学校で「当てはまる」と回答した児童が、都、それから全国よりも非常に低いという結果になっています。中学校３年生についても同様で、都、国よりも低い数値になっています。ここから、練馬の子どもたちは、総じて地域の行事に参加している児童生徒の割合が低いということが言えます。

最後、（６）です。「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」は、貢献意欲にかかわる設問です。これについては、小中学校とも都、国とほぼ同等の結果となっております。

【齋藤副参事】

私からは、体力調査結果のことについてご報告いたします。

６ページ、７ページをご覧ください。８つの種目で子どもたちの体力を測っております。握力では筋力、上体起こしでは筋力、筋持久力、長座体前屈では柔軟性、反復横跳びでは敏捷性、５0m走ではスピード、20mシャトルランでは全身持久力、立ち幅とびでは瞬発力、ソフトボール投げでは巧緻性や瞬発力を測っております。

練馬区の児童生徒の体力の状況ですが、大きな特徴としましては、東京都の平均的な体力であるということが言えると思います。強いて申し上げるならば、数センチの差ではございますけれども、立ち幅跳びに、全ての学年の児童生徒について、小・中学校ともに課題があるということになります。

【竹内施設給食課長】

続きまして、８ページ「子どもたちが『生きる力』を身に付ける場や環境の提供」についてです。子どもたちが夢や目標を持ち困難を乗り越える力を身につけ

るために、さまざまな活動や取組を行っております。現在の主な取組欄に記載しております４つの事業について、順に説明をさせていただきます。

９ページは「臨海学校および移動教室等の実施状況」です。練馬区の臨海学校、移動教室、スキー移動教室の３つについて、それぞれ対象および宿泊日数を記載しております。

臨海学校は、中学１年生のうち希望者となっておりますが、全中学校における生徒の参加率は例年70％を超えておりますので、希望者といいましても3,000人以上が参加する大規模な学校行事となっております。

続きまして、10ページです。場所ですが、軽井沢・下田・武石・岩井の少年自然の家を拠点に、周辺の地域で実施しております。

次に、目的です。①集団生活の中で、児童・生徒同士または教員との交流を図ります。②遠泳やスキー実習を通じまして、体力の向上や基本的な技能の習得を図ります。③自然に親しみ、日常生活では得られない体験を通じて、学びを深めていきます。

今後の方向性ですが、普段の学校生活の場とは異なることから、児童生徒が安全に安心して活動できるように、津波や地震など、災害が発生する可能性も考え、安全確保に努めながら、学校と教育委員会が連携し、各種事業を実施していきたいと思っております。

続きまして、11ページです。このページでは、各事業について詳細を記載しております。特に、臨海学校で行う大遠泳については、臨海学校の実施前から、体育の授業や夏休み中の水泳練習を重ね、生徒の泳力の向上を図るとともに、目標に挑戦する心の育成、仲間同士の友情を育むものです。これらは、確実に生徒の記憶の１ページに残るような良い思い出になるものと思っております。

【加藤青少年課長】

私からは、12ページからの青少年健全育成活動の実施状況についてご説明させていただきます。

（１）青少年育成地区委員会です。活動主体は、区内17地区の青少年育成地区委員、2,200名です。地区によって80名から250名ぐらいおり、地域のボランティアとして委員があります。活動内容ですが、青少年の自主性と社会性を育むための活動として、青少年向けの地域行事、野外活動やスポーツ、文化事業、地域交流事業等、さまざまな事業を平成28年度に約220事業、青少年は８万人ほど参加している状況です。写真は各地区の様子です。

次に、13ページ、（２）青少年委員会です。活動主体は小学校の学区域ごとに１名いる青少年委員で、青少年にかかわりのある活動実績のある方の小学校長による推薦です。活動内容は、ジュニアリーダー、仲間づくりのリーダーとして、地域におけるさまざまな活動において中心的な役割を担う青少年の養成をするため

の講習会、仲間づくりや野外活動などを実施しています。主に小学校５年生、６年生と中学生を対象に、年９回から10回ほどの講習会等を実施してございます。下は講習会の様子の写真です。

次に、14ページ、（３）ねりま遊遊スクール講座等です。活動主体は、子どものための活動に取り組む地域の団体やＮＰＯ等があります。こちらは、平成14年ごろから地域のＮＰＯと連携して、地域学習活動の活性化の事業として始まりました。現在、子育て学習講座やイクメン講座等も実施しており、138団体、500講座ほど実施をしています。

15ページは平成28年度の各委員会等の実施状況です。

（１）青少年育成地区委員会は、スポーツ活動で野球大会等、なかなか学校ではできないようなスポーツ事業を実施しております。野外活動では、宿泊キャンプやデイキャンプ、ハイキング等を実施しております。そして、地域の活動としてはボランティア活動等にも取り組んでおります。

右側の（２）青少年委員会ですが、こちらはジュニアリーダーを養成する秩父キャンプをメインに、事業を実施しております。

（３）ねりま遊遊スクール講座については、記載のとおり、なかなか学校ではできないような事業等を実施してございます。

最後に16ページです。課題と今後の方向性です。

（１）青少年育成地区委員会ですが、青少年育成地区委員会委員は固定化しており、安定的な事業が実施できる一方で、将来の担い手が不足し、その確保が必要だということがあります。また、野外活動や川遊び、キャンプなどのノウハウを持ち、地域で子どもたちを支えて見守る、という意識を持った委員を育成することも課題の一つです。また、中学生の参加が減っています。今、小学生は７万5,000人ほどですが、中学生は3,000人あまりということで、中学生の参加や中学生向けの事業が少ないということも課題です。

今後の方向性としては、ＰＴＡ等、若手の委員の確保と、それに伴う事業の活性化、また、中学生等の子どもたちが、事業に参加するだけではなく、みずから企画・運営していく事業の展開が必要だろうと考えております。

（２）青少年委員会ですが、青少年委員は65名おりますが、１期２年、10年が最高で５期までできますが、その人材育成が必要です。

また、今後の方向性としましては、ジュニアリーダーの養成講習会を終了した、これから地域で活動していただくような青年リーダー、受講生を中心に地域活動ボランティアがおりますが、そういった青少年の人材の確保が必要だと考えております。

最後、ねりま遊遊スクールですが、課題は地域の受託団体が固定化、減少しており、以前は180ほどの団体がありましたが、今、団体数も減っており、これからの課題だと捉えております。

今後としては、類似の事業、子どもの居場所事業とか児童館事業、スポーツクラブでの事業等さまざま取り組んでいますので、それらの事業との連携が必要だと考えております。

【清水学校教育支援センター所長】

私からは、17ページの支援が必要な子どもへの学習支援事業の実施について説明いたします。中３勉強会です。

対象は、生活保護、就学援助の準要保護世帯の中学３年生です。家庭の環境、生活環境などにより、経済的な支援を必要とする家庭の生徒に対する事業です。

目的は、学習習慣の機会を設けることで、基礎学力の定着を支援することにより、子どもが将来の進路選択の幅を広げること、また自立した生活を送ることができるよう力をつけていくものです。

（３）実施方法です。委託により実施しております。27年度までは、生活保護の世帯については福祉事務所が、準要保護の世帯については教育委員会が主催していたものを、28年度から連携し、教育委員会が実施しております。

（４）実施の状況は資料のとおりです。年々会場を増やし、今は利用希望者全員を受け入れて実施しているところです。

18ページは進路先の状況です。28年度の修了者212名については、全員進路が決定しております。親子、学校、中３勉強会の事業者と進路について相談しながら、各々の進路を目指しております。

（６）アンケートの抜粋です。中３勉強会では、利用者に随時意向を聞いており、まず、中学２年の時点で次年度の利用意向の調査をしています。２番目は、中３勉強会修了時の３月に全員にアンケートをしたものです。また、翌年度には進路後、高校１年生の利用者の方にフォロー調査を行っています。

この調査結果によると、左側の設問では中３勉強会を通じて将来の夢や目標について考えるきっかけになった、考えることができたか、について、「そう思う」、「やや思う」と肯定的な意見が72％ありました。また、右側の中３勉強会が相談に乗ってもらえるような雰囲気であったかという問いについては、87％が「そう思う」、「やや思う」という前向きな回答をもらっております。

勉強会を見学しておりますが、各会場とも指導員と生徒が信頼関係を築きながら、学習面だけでなく心のサポートなどもできていると感じています。

続いて、今後の課題です。利用者のその後のフォロー調査を昨年度、今年度と実施しています。28年度の修了者212名については、この９月に調査を実施しまして、在学状況や進路先で悩みなどがないかという項目についての回答を分析しているところです。今後、悩みや不安があると答えた生徒については、相談先の紹介などもしていきたいと考えています。

また、個々の利用者に最も適した学習支援の提供については、中学校２年生を

対象とした意向調査の中で、勉強会を希望しないという回答も幾つかありました。その中には、塾や通信教材などの利用などもなく、何もしていないけれども学習意欲がないという生徒も見られましたので、そのような生徒たちへの働きかけについて考えていきたいと思っています。

また、区で実施している各課の学習支援事業との相互連携、生徒のやる気のタイミングなどに応じて、希望者を受け入れる体制などについても検討を続けていきたいと考えております。

【芝田教育指導課長】

子どもたちがたくましく生きていく場の提供について、最後が地域未来塾になります。20ページです。

この地域未来塾とは、学校・地域連携事業、これはもともと国の事業ですが、その事業の中の一つの取組です。

対象としては、「家庭での学習が困難な児童・生徒」、「学習習慣が十分身についていない児童・生徒」という国の規定はありますが、実際は、希望する児童生徒を対象としています。

目的は、ここに示したとおりで、実施方法は学校によって異なりますが、放課後や、土曜日・日曜日、あるいは長期休業日に実施をしております。指導者は大学生、教員ＯＢといった地域の方々の協力をいただいております。

左の表に示しておりますとおり、この学校・地域連携事業を実施している学校が今年度は64校あります。その中で、地域未来塾を７月の時点で実施している学校が小中学校合わせて38校となっています。地域連携事業については、来年度、全校が行う予定になっています。

右の表の地域未来塾実施日ですが、小学校は、今年の７月末時点で実施の平均日数が13.1日で、１校当たり27.1人、中学校は11.0日で、36.5人という結果です。

最後のページはこの地域未来塾の成果です。学校側の捉えとして、アの①学習に向かう意欲の向上、学習内容の基礎・基本の定着が図られた、という声等があります。生徒側からは、練馬区で実施している中学校の生徒の感想ですが、３つお示しをしております。③自宅学習は難しいが、未来塾は学習に取り組む環境が整っていて学習しやすい、というような感想もあります。

課題と今後の方向性です。講師の人材の確保が課題で、方向性は、来年度学校・地域連携事業を全校実施しますので、地域未来塾の実施校も拡充をしていきたいと考えております。

【前川区長】

どうもありがとうございました。それでは、これから意見交換を行いたいのですが、今日の会議は、このテーマで今日結論を出すとか、方向を決めるとか、そ

のような趣旨ではございません。１つはこの資料についてご質問があればそれをお受けする。もう一つは、どのような角度でも結構ですからどうぞ忌憚のない自由なご意見をいただければと思っています。こういったことを繰り返しながら、だんだん議論を深めていくことができれば良いと思っております。どうかよろしくお願いいたします。
　いかがでしょうか。

　私から最初に質問して良いですか。資料の４ページ、意識調査の結果についてです。現状はこうだけど、昔と比べてこうだということは何かありますか。例えば、夢や目標を持っているかというのに当てはまるのは、今は69.3％、どちらかといえば当てはまる、を足すと85％ぐらいになりますが、昔はどうだったのかはわかりますか。

【芝田教育指導課長】
　全国学力・学習状況調査が始まってからの結果を確認したところ、傾向としては、変化はほぼないということです。練馬区の子どもたちの意識としては、今お示しをしているような状況が続いていると言えるかと思います。

【前川区長】
　始まったのはいつごろからですか。

【芝田教育指導課長】
　全国学力・学習状況調査については、平成20年前後だったかと思います。

【前川区長】
　そうではなく、もっと長い目で見て、例えば、私の子どものときを考えると、小学生の子どもだったら型にはまったような目標や夢がありました。野口英世のようになりたいとか、実に単純な夢や目標をみんな持っていたけれど、今の子どもはそのようなものはないのですか。

【芝田教育指導課長】
　今の子どもも、なりたい職業などについては学校の中でも話題になることがございます。（４）の「将来の夢や目標を持っていますか」という設問は、練馬の子どもたちも都や全国の傾向ともほぼ同じ状況です。さまざまな子がいますので一概には言えませんけれども、個別の子どもたちについては、夢や希望を持っている子もいれば、まだぼんやりしている子もいるということだと思います。

【前川区長】
どうぞ、皆さんも何でもお聞きになってください。

【坂口委員】
５ページの地域活動に子どもが参加しているかという項目の「当てはまる」と答えた割合が低かったので、地域の行事がどのようなものか子どもは意外にとわからないのではないかと思いました。例えば、ラジオ体操は、町会の方が実施しているということについて、子どもはどの程度わかっているのかなと思います。この項目の割合の低さに驚いたのですが、いかがでしょうか。

【芝田教育指導課長】
確かに、委員ご指摘のとおり、子どもが地域の行事というのをどのように認識しているかというのは難しいところかと思います。もしかしたら子どもたちは認識なく地域の行事に参加しているかもしれません。実際、青少年課長からもお話ししたとおり、練馬ではさまざまな取組がなされていますが、それを地域の行事と認識していない子もいるかもしれません。

【外松委員】
今、資料を見させていただき、お話を伺って、練馬区内では、本当に多くの方々が子どもたちのためにかかわってくださっているということを改めて非常に強く感じました。
13ページ以降のところで、青少年健全育成活動の実施状況とあります。特に（２）のジュニアリーダーを養成するための講習会は、ずっと練馬で地道に活動が続けられているもので、卒業した子どもたちが大人になってから、改めてまた、この青少年育成の地域活動にかかわっているということも説明していただきました。この参加したＯＢ、ＯＧたちが、例えば、小学校に行って、自分の体験などを小学４年生以上ぐらいの子どもたちに話したりする機会はあるのでしょうか。

【加藤青少年課長】
ジュニアリーダー養成講習会修了生が、青年リーダーや地域活動スタッフとして地域で活動しているという状況がございます。そしてまた、それを卒業して社会人になると会社等にお勤めになりますが、その後、余裕ができた段階で、青少年委員になられたり、青少年育成地区委員会に入られたり、他の地域活動をしていたりという話も聞いております。また、この卒業生というのは学校教員を目指している子が多いという実態もございます。ただ、そのＯＢが学校等で子どもたちに話す機会を設けることは、実施しておりません。

【外松委員】
　例えば、小学校高学年で育成の講座を受け、卒業した子たちが中学生になったときに、中２ぐらいでしょうか、少しゆとりができた子たちが、つまり小学生にとっては憧れの先輩である中学生たちが小学校に行って、小学校のときにこのような活動をして、自分はこんな思いをした、などの話を聞くことができると、また小学生たちも、自分も参加してみようかなという気持ちになるのではないかなと思いました。

【加藤青少年課長】
　今、委員がおっしゃるとおり、青年リーダーもジュニアリーダーの講習会の受講生も、実際に地域スタッフとして学校や地域の活動に参加していて、子どもたちの指導に当たったり、大人のお手伝いをしたりしています。その中で、ジュニアリーダーの初級は小学校５年生、６年生で、中学生は中級、青年リーダーとあるのですが、青年リーダーもそういったジュニアリーダーの活動にかかわってもらうと、青年リーダーに憧れて、自分も将来なりたいとか、地域で活動したいという子もいるようです。そういった機会を捉えて、子どもたちに青年リーダーやジュニアリーダーの活動を伝えていき、将来地域の担い手になっていただけるように考えてございます。

【外松委員】
　いろいろな方たちが心を砕いて育成に支援をしてくださっております。そういった視点もあれば、小学生の間から自分もやってみようという子が続き、活動も続くかと思います。

【前川区長】
　臨海学校はどれぐらい参加しているのですか。

【竹内施設給食課長】
　29年度で言いますと、中学生１年生の希望者ですが、全体の71.8％、3,103名参加しております。ここ５年ほどの傾向を見ましても、大体70％の半ばの参加率になっており、多いときには3,500名を超える場合もありました。

【坂口委員】
　臨海学校の話が出ましたので、移動教室について伺います。11ページの例の中にないのですが、ある校長先生に伺い、私は非常に評価したいと思うことが、移動教室での牧場体験です。最初、まず牛小屋に行くと、みんなが臭いだの汚いだの言うけれども、そこのお掃除から始めます。デッキブラシで一生懸命掃除をし

て、汗をかいて、それから指導者に従って、牛の目を見ながらブラッシングをしてあげます。そうすると、子どもたちは夢中になって、２日目になったら臭いだの汚いだの言うことがなくなります。そして、残酷なようだけども、その日に牛や羊のお肉でバーベキューをいただき、命をいただくという体験をします。繊細な牛を子どもに扱わせてくださる、牧場主の英断もそうですけれども、子どもがほんとうにたくましくなっていく、という話を私は非常に感銘を受けて聞きました。牧場体験の実施は難しいのでここには入っていないのでしょうか、いかがですか。

【芝田教育指導課長】
今、委員からお話があった牧場体験ですが、実施をしているのはおそらく武石少年自然の家に宿泊をしている学校かと思います。４つの少年自然の家を活用しており、５年生のときに海に行ったら、６年生のときには山に行くというように、実施しております。実施場所に応じて各校の工夫で活動をしています。牧場体験については非常に教育的効果も高く、複数の学校でも取り入れているということを聞いております。

【前川区長】
たくましさの一つですね。

【坂口委員】
移動教室を体験した子どもたちがどれだけ変化するかということを感動的に校長先生が書いていらしたのを読んで、私もそうだろうなと思いました。自分の家族を離れて自分の意見は通らない、でも、協力し合わないとその数日は過ごせないという中で、さまざまな体験ができるのですから、移動教室の体験次第では、子どもはたくましく、一皮むけていくのだと思いました。先生方は大変だろうと思いますけれども、ぜひ、プログラムについて、成果を上げるようにしていただけたらと思います。
家でのルールが通じない生活体験や、自分のペースで行動できず、我慢しなければならない場面を経験する中で、友達との関係性を結んで、絆を深めていく。また、先生も数日をともにすることで、大人として向き合うこともできる。そして豊かな自然体験がある、ということをしっかりと伝えた学校だよりを読みまして、大変感動いたしました。

【外松委員】
関連しまして、11ページに記載されております臨海学校、移動教室、スキー教室についてです。ほんとうにこれはすばらしいことだと感じております。移動教

室に関しては、先ほど坂口委員のおっしゃられたとおりだと思います。
　スキー教室も、練馬区の場合は健康な状態で参加すれば、必要な道具は全てあり、指導者もいて、全く未経験の子でも最後の日にはリフトに乗って上から滑って降りてくることができます。これはごくわずかな家庭でしか体験できないことです。恐怖心とかいろいろありながらそれを克服し、最後は大きな達成感を味わって帰ってくることができる教室だと感じております。もちろん友達同士の支え合いもたくさんあるかと思います。
　それをさらに上回るのが臨海学校だと私は思います。海ですので、生命の危険と隣り合わせの、ほんとうに大変な授業です。学校でも何回も何回も水泳の指導を実施し、プールとは違って海ですから、自分の足は立たないような中で、恐怖心と戦いながらバディを組み、友達と助け合い、指導員の人に助けてもらいながら遠泳をするということですので、人生の中ですごい経験になると思います。他区からいらした校長先生からも、今臨海学校をやっている中学校はほとんどないと伺ったこともございます。正直、赴任してきてこの行事が一番嫌だと思いました、と伺ったこともございます。それはやはり命の危険と隣り合わせの行事だからだそうです。それを練馬区では万全な体制をとって、行っています。先ほども3,000人ちょっと参加しているというお話がありましたけれども、もしかしたら人生で一度しかできない経験になるかもしれませんので、できるだけ多くの生徒が参加して、そこで心と体を培ってもらえたらと願っております。

【竹内施設給食課長】
　今、委員からお話もありましたが、臨海学校というのは、多くの生徒の心に残り、思い出になっているようです。卒業式のときに、中学校の思い出を考えると、臨海学校がまず挙がるということも多々見られます。特に練馬区の臨海学校は、大遠泳が大きな目標でして、それについては、教職員、また現地のスタッフも含めて細心の注意を払いながら行っているところです。こちらも、昭和40年代からずっと歴史を重ねてきておりますので、ぜひこういった形で、生徒に良い経験を与えたいなと思っています。
　他区の状況を見ますと、臨海学校でもどちらかというと砂場での水遊びが主な内容になっていることが多いかと思います。また、臨海は危険なので、林間ということで山のほうに行く状況もあるように聞いています。
　練馬区の臨海学校の良さを、安全確保第一で続けていきたいと思っています。

【前川区長】
　他の区や他の市はどうなのですか。同じようなことをどれぐらいの学校がやっていますか。臨海学校も移動教室もスキー教室も、練馬区は多いほうなのですか。

【竹内施設給食課長】
近隣の区の状況について若干調べてきましたが、移動教室については、各区とも２泊３日が多いようです。５年生で２泊３日、６年生でも２泊３日という形で移動教室を実施しているところが多いように聞いております。中には、豊島区や北区のように４年生のときにも実施する区もあるように聞いております。

【前川区長】
他の区でもやっていますか。

【竹内施設給食課長】
23区では、移動教室はもちろん行っておりますが、臨海学校については行っていない区のほうが多いように聞いております。

【長島委員】
私が一番興味深かったのが、３番の学習状況意識調査結果のところで、３ページの（１）「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがありますか」です。中学３年生では全国を下回っています。２番になると、「当てはまらない」という割合が増えています。１番もそうですが、「自分には、よいところがあると思いますか」というところも中学生３年生になると「当てはまらない」が多くて、「将来の夢や目標を持っていますか」も、全体的にどれも練馬区がかなり引き離して多いのですが、特に４ページの（３）の「自分には、よいところがあると思いますか」は、何をするについても非常に大事なことだと思います。勉強にしても、体育にしても、あらゆることに対して自信というか、自分が好きというか、自分には良いところがあるという、自己肯定感の高い子どもでないと積極的な行動をとれないのではないかと思います。この辺が練馬区はかなり低いのですが、この調査結果を見て具体的にどのように感じているのか、もしくはこれまでも低かったのか、今年が特に低いのか、その辺についても教えていただければと思います。

【坂口委員】
今のお話に私もつけ加えたいと思います。
もう40年ぐらい前になりますが、小学校６年のあるクラスで、卒業学年だったので、親しんだクラスがお別れになるときに、どの子も良いところがあるという話し合いをクラスでやったそうです。何とかだったらこの子が１番という形で、例えば、駆けっこ１番とか、給食の早食い１番だとか、昆虫については何でもよく知っているから、それも１番だとか、みんな何か１番をもらったそうです。ちなみにうちの長男ですけれども、地図見１番というのをもらいました。地図見っ

て何だろうって思ったら、地図が大好きで一生懸命地図を見ていたということでした。子どもたちが話し合い、お互いの個性を認め合っていたということだと思います。その子なりの力を認め合う、という形がクラスの中にあれば、自信を持つ子どもになっていくのだと思います。それも加えてお答えいただければと思います。

【芝田教育指導課長】

４ページの（３）、「自分には、よいところがあると思いますか」というのは、いわゆる自己肯定感に係る設問です。ご指摘のとおり、小学校では、肯定感な回答がほぼ都と国と同じ状況で、「どちらかといえば当てはまらない」、「当てはまらない」も都と国と同じと言えますが、教育委員会としても、中学校３年生については、自己肯定感を十分に持たせ切れていないところが課題だと捉えています。自分には良いところがあると思えない中学３年生が３割いるということは確かに課題だと思います。

自己肯定感は、まさに行動の原動力にもなりますから、本日のテーマであるたくましく生きるための、まさにベースのところだと言えます。学校では当然、この自己肯定感を高めるための活動も行っております。坂口委員からもお話があったように、小学校ではお互いに良いところを見つけあって、それをメッセージとして送り合うような活動もございます。

中学校では教科担任制になり、担任が１週間の中で担任する子どもたちを持つ時間には制限があるので、具体的に自己肯定感を高める活動というのはできにくい状況があります。しかしながら、こうした自己肯定感にかかわる課題については、毎年度まとめております学力調査報告書にも掲載をして、各学校に改善に向けた働きかけをしていきたいと考えております。

【長島委員】

自己肯定感は特に自分でもどうにもならない感情で、他人から褒められることによってしか伸びていかないと私も認知しています。いくら頑張っても褒めてもらえない限り、認められない限りは絶対に伸びないので、やはり教育という点では一番大きなところだと思います。努力したか、していないかというよりも、ふだんから人に認められているか、認められていないかが自己肯定感が高まるかどうかにかかわると考えられます。自分はこれだけのことをやってきたからすごいのだ、と思うのではなくて、人に認められて自己肯定感が高まるのです。そう考えると、先生方からのアクションが子どもたちにとって非常に大きな影響があり、だからこそ、中学生にもなれば簡単に褒めるということは難しくなってくるかもしれませんが、これがないと、その後高校生や大学生になっても、自分の思っていることができなくて、引きこもってしまうようなことにつながっていく気がし

ます。何か良い対策があればぜひやっていっていただきたいと感じました。

【前川区長】
安藏委員、いかがですか。

【安藏委員】
私も同感です。
他に私が気になっているのは、体験学習とか自然に触れ合う経験とかいろいろ取り上げておりますけれども、今は環境があまりにもよくなり過ぎてしまっているのではないか、ということです。就学前の子どもたちを見ても、虫が嫌いだとか、公園に遊びに行ってお弁当を食べるときでも、蟻んこが上ってくると固まってしまって食べられないとか、大人の保護者であっても、ゴキブリ１匹出てくると悲鳴を上げて対応できないことがあり、そんな場面が気になっています。
よく芋ほりなどにも出かけますけれども、そういったシーンの中でも、土の中から虫が出てきて、芋ほりができなくなってしまう場合もあります。芋ほりは結構泥だらけになったりしますが、そういった自然と触れ合う機会をどんどん増やしていかなければならないのかな、と感じています。
また、伝承行事の餅つきなどでも、ノロウイルスの問題とかがあり、なかなか自由にできない状況です。安全な場を提供することだけでは、反対に子どもたちが弱くなってきてしまうのかなと感じております。砂場１つとっても、抗菌の砂を使うことが増えてきており、反対に子どもたちの抵抗力を弱めているのではないかと思います。あまり過保護にしてしまうと、これからが心配です。
就学前の子どもたちを見ますと、運動会でカーブを走るような競技をした場合、小学校でも低学年では真っすぐしか走らないのに、何でカーブを走らせるのかと保護者からのご意見があります。組み体操やその真似事のようなこともしますが、はだしで運動場を体験すると、保護者から非常に心配されます。グラウンドには小さな小砂利もありますが、膝に何もサポートしないまま膝をつくと、子どもに痛い思いをさせてしまうことを心配する、保護者からの要望が非常に強いことを感じております。保護者の意識を変えていかないとそういった取組はなかなか難しいと思いますが、子どもたちを外に連れ出して、いろいろなことをする経験を持たせないと、これから大変なのかと感じております。
つぎに、この資料で気になったのが、投力についてです。教育委員会で毎年実施している事務の点検・評価で、以前「１」の評価をつけましたが、今回、数字を見ると全然問題なく、数字的にもよくなっていて、実際この場で評価したことによって、こんなに変わるものかと驚きました。
今回は幅跳びが気になる数字になっていますが、具体的にどんな運動をしていけば解決に結びついていくのでしょうか。前回の例で言うと、学校で投力をつけ

るために、ロープに丸い輪をつけて思い切り投げる格好をしたり、お昼の休憩時間に運動したり、いろいろ工夫しているところも拝見させていただいており、学校での取組が非常に大きいのかなと思いました。実際学校だけで体力を上げるのは難しいのではないかと正直思っていました。限られた時間の中の取組でもこれだけ成果が出るということは、工夫していけば改善の余地はあるのかなと感じたところです。

【齋藤副参事】
委員ご指摘のとおり、教師が意識すること、学校で組織的に取り組むことによって、ここまで変わるということがわかりました。立ち幅跳びの動きにつきましては、両足で踏み切って前に跳ぶという動作で、日常生活の中ではその動きをする機会はほとんどありません。それをどうするかについてはこれから考えなければいけないのですが、子どもたちには遊びや運動を楽しむ中で、そのような能力が向上できるような方策を、学校や我々で鋭意考えていかなければいけないと思っております。

【外松委員】
先ほど長島委員がおっしゃっていた自己肯定感に関連してですが、自己肯定感が高いということは、たくましい心があるということにもつながることではないかと思います。心も体も両方たくましくなければ、たくましい子とは言えないと思います。
特に中学校の先生方はほんとうに大変だと思いますが、生徒さんと接する際に投げかけるちょっとした言葉がかなり重要になってくるかと思います。その辺の研修なども設けていただき、具体的に、どの状態のときにどの言葉がけをするほうがより適切なのかなどを体験する機会があれば良いと思います。
また何年か前に、西日本新聞社が食に関するブックレットというのを出版していました。前のことなので、記憶が定かではありませんが、2000年代の最初のころ、福岡県を中心として、四国も一部あったと思います。子どもたちが学校で無気力だったり、体力がすごく落ちてきたり、集中力が欠けていたりしている、そのような現状を校長先生方がすごく心配されて、何に取り組めば少しでも良い方向に変わるのかということで、地域の方やいろいろな方と話し合ったそうです。親御さんを啓発しようとしても、大人はなかなか変わらない、変わるのはやはり子どもだということで、地域性もあるかと思いますが、大変だけれども朝早く起きて家族のためにみそ汁をつくろう、それから、給食はもちろんありましたが、日にちを決めて、お弁当をつくってこようという食育の運動を始めたそうです。お父さんやお母さんより早く起きて、子どもがみそ汁をつくるのです。そうすると、家族が起きたときには温かいみそ汁ができているということで、家族からと

ても感謝されます。それから、子どもは朝みそ汁をつくるために、夜いつまでもゲームをしているわけにはいかない、テレビを見ているわけにはいかないということで、夜も自然と早く寝るようになったそうです。そんなことの繰り返しの中で、授業に対する集中力も非常に高まったり、友達関係のトラブルも少なくなって穏やかになったり、また、親や兄弟から感謝されるので、さっきの自己肯定感にもなりますが、自分に対する自信につながったりということがあったそうです。

また、地域の女子大でもお弁当づくりやみそ汁づくりを授業の中で取り入れたところ、あまりにも大学生たちが粗末な食生活を送っている実態がわかって、それを実践することで、彼女たちも自分の体の変化を感じて、暮らし方が変わったという体験レポートがいろいろと載っておりました。

練馬区では何ができるのかと、そのことを思い出しているところです。地域性もありますので、すぐに同じことをできるかはわかりませんが、大人を変えていくのは、確かに大変なことです。しかし、子どもに働きかけたら、子どもは必ず変わることができますので、子どもを変えて、大人の意識も生活の仕方も変えていくことは可能なのではないかなと思っています。何ができるかは、また皆さんと考えていかなければならないと思います。

【前川区長】

ありがとうございます。いろいろなご意見をいただきましたが、たくましさとか自己肯定感とは一体何だろう、というところもできればご意見をいただければと思っております。

たくましさというと、例えば昔の、それこそ軍国主義とか全体主義の時代の写真で見るようなたくましさでは、おかしなことになります。一方で、自己肯定感ですが、人間は矛盾に満ちていますから、一方では人に勝ちたいという気持ちと、また一方では人と平等でありたいという気持ちと両方あって、どちらかが強すぎると、やはりおかしなことになってしまいます。公教育の場でたくましさはこうだと決めてしまうのも、どうかという気もしますが、そこが全然ないと何もできないので、その辺をどう考えたら良いのか、率直なご意見をまた伺えればと思います。

自分のことになりますが、今は頑健ですけれども、子どものときは体が弱かったものですから、例えば夏休みに、朝早く起こされて、子どもが集められてみんなで体操をさせられたりしましたが、少しも楽しくなかったです。何でこんなことをしなくてはならないのかと思っていました。ただ、全体でやることはもちろん大事です。全体でやらなくてはいけないし、そうでないと教育にならないと思います。だからといって、そればかりを強調し過ぎると、またおかしなことになります。その辺の兼ね合いをどう考えたら良いのかなと思っています。

自己肯定感も同じです。やはりある意味で競争という原理がなければ、教育に

ならないと思います。だからといって、競争だけではおかしくなります。そこの兼ね合いをどう考えたら良いのかなと思います。これはそう簡単に答えは出ないけれども、大変難しい問題ですけれども、ぜひご意見をいただきたいとおもいます。

【坂口委員】

私のささやかな体験ですが、青少年育成活動を通して、地域で20年、30年近く子どもたちの様子を見てきました。そこで、プログラムを組み立てることもしてきました。

先日、青少年課長に他の17地域ではどんな活動をしているかお伺いしました。委員の皆さんが子どもたちのために、汗水流していろいろなことをやっていらっしゃる実態がよくわかりました。そこで、何かをしてくださいということではなく、例えば「たくましく生きていく子どもたちの育成」という視点でプログラムを考えてください、とお願いすることはできると思います。一人一人の子どもがそれぞれ自立して育つことについて、公的に口は出せないですけれども、練馬区にはこのような目標がありますよということは、一言あっても良いかと思いました。

また、子どもたちは、自分の弱点を受け入れたり、人の弱さにも共感できる精神を持ったり、いろいろな意見や利害の衝突を経験することが必要です。それを繰り返して自分を確立していかなくてはならないと思います。

今、こども食堂をやっていますが、とてもおもしろいです。学校でもおそらくクラスの中でいろいろなもめごとがあって、あの子と並ぶのは嫌だとか、一緒に食べたくないとか、いろいろなことを言い出します。けれども、私たちはそんなこと全くお構いなしです。狭い部屋で、食卓が２つしかありませんから、ぎゅうぎゅう詰めで並んで食べてもらいます。

そうしているうちに、一人っ子でも兄弟の多い子どもでも、いろいろな人たちが平等に触れ合って、一緒にその状況を受け入れていきます。それから、同じものを一緒に食べることで、食卓の中は不思議な共感や仲間意識を生むようです。大人が上手に目を配っていけば、子どもの争いや物をおさめる力がつくということも経験しております。

私の経験から、子どもたちの争い、コンフリクトみたいなものがあっても、それが子どもの成長だという大人の理解があれば良いのかなと思います。

【前川区長】

そうですね。ほかの皆さんは、いかがでしょう。

学校教育では、競争と連帯みたいなことはどのように考えますか。

【芝田教育指導課長】
大変難しいご質問をいただきましたが、競争と連帯は、実際に学校にもあるものです。学校では、当然のことながら、競争よりも連帯に重きを置いて指導をしていますけれども、運動会では短距離走で着順は決めますし、そのような競争は実際にあります。区長がおっしゃったように連帯だけでもだめだし、競争だけでもだめなので、やはりバランスをとって公教育の中で子どもたちを育てていくというところになるのではないかなと考えております。

【前川区長】
なかなかそれ以上は言えないですね。
率直に、どのようなことが子どもたちに資することになるのかを考えていくしかないと思うのですけれども、いかがですか。

【長島委員】
先ほど区長がおっしゃっていた、子どものころの嫌なことは、結構あると思います。嫌なことだけれども必要なこともたくさんあると思います。私もそうですけれども、朝のラジオ体操が嫌だったとか、そういった経験があって、でも、やってよかったと思えることもたくさんあると思うので、子どもに気を使って嫌なことを減らしていくのではなく、子どもを経験した大人の立場として、嫌なことや超えなきゃいけない試練を与えたりすることが必要だと思います。
今、教育委員を務めさせていただいて、各学校を回り、給食をご一緒させていただいたり、いろいろ行事に参加させていただいたりしていると、子どもたちはほんとうにいつも楽しそうで、特段コミュニケーションに困って嫌なことがあるような様子も見受けられないので、それは非常に良いことだと思います。昔と大分違う感じはするのですが、経験としては、競争で負ける悔しさもそうですし、先程坂口委員がおっしゃっていたように、狭い部屋で集団生活をするといったような経験もとても必要なのではないかと思います。

【前川区長】
他にもあれば、何でもどうぞご意見をおっしゃってください。

【坂口委員】
修学旅行で、以前は東北地方に行って農家に民泊をして、田植えや稲刈りなどのいろいろな体験をしたり、その地元にある劇団の方に、演劇というか、体で気持ちを表現する体験とかをしたりしていておもしろいと思ったのですが、今の行先はほとんどが奈良、京都なのでしょうか。

【芝田教育指導課長】
東北地方に修学旅行に行っている中学校は１校だけあります。ほかは京都、奈良がほとんどという状況です。

【坂口委員】
自分の気持ちを言葉や動作で表現することは、とても大切な教育だと思います。私も今伝えたいことがなかなかうまく表現できませんが、自分の思うことをきちんと言葉で伝えたり、相手に共感してもらったりという体験はおもしろいと思います。劇団員のプロの人たちの指導を受けて発表会があったのを見た記憶があります。また、食べ物をつくり出す農家の体験などは、親戚に農家がない子どもたちにとってはとても良いプログラムだと支持していたのですが、１校はまだ続けていらっしゃるということですね。ありがとうございます。

【外松委員】
現在のカリキュラムの中では、総合学習の時間は少なくなってきておりますけれども、総合学習は全ての教科を動員して、社会に出たときのプレゼンのようなことも中に含まれております。自分で調べたり、図書館でも資料を集めているようです。総合学習の発表を見せていただいたときに、もしかしたら、あまり言葉の意味がわからないまま何かを写しているのかもしれないなと思うこともありましたけれども、体全体を使って跳びはねながら説明をしている子にも出会ったことがございます。
時間数は少なくなってはいますけれども、総合学習は子どもたち一人一人がいろいろなことを学ぶ総合力が要求される教科であると、私は思っております。総合学習の時間を大事にして、子どもたちがそこで自己表現ができるようになったら良いと思います。

【前川区長】
資料のご質問とかはいかがでしょうか。
臨海学校、移動教室、スキー教室と、すごく恵まれていますね。私は田舎の育ちですから、子どもの時に、都会では臨海学校なるものがあり、林間学校もあると聞いて、びっくりしてうらやましいなと思ったことを今でも覚えています。考えてみれば、私が子どものときは毎日が臨海学校に行っていたようなものですが。
練馬のようなところでは、このような工夫をしなくてはいけないということなのでしょう。

【坂口委員】
ちょうど今、私たちは教育に関する事務について評価をしなくてはならない時

期で、一生懸命頭を悩ませていますが、17ページからの３、最後の１人まで救っているという数字を見てうれしく思います。中学３年生から、次の進路をいろいろ決めますが、みんなどこかに入っていらっしゃいますね。19ページには進学後のフォローも対応しますとなっていますから、練馬区の中学３年生で少し心配な子どもたちについても、その後もきめ細かなプログラムが用意されていることを見て、本当にうれしく思いました。

【前川区長】
ありがとうございます。
支援が必要な子どもへは、学習支援だけではなくて、全体としてのいろいろな支援が必要になってきています。
この場で議論することではないのかもしれませんが、学校教育とか、支援が必要な子どもへの支援ということは明快でわかりやすい話ですが、青少年の健全育成というのは昔から難しいと思っています。
何をもって健全育成とするのか、昔、私は児童福祉行政を長くやっていたので、そのようなことを考えていたわけですけれども、保育所だとか養護施設という話だとわかりやすいですよね。極めて明快です。一方で健全育成となると、何が健全育成かという話になります。やる人も大変ですし、子どもたちに与える目標も難しい。だからといって、これが大事だということも事実ですから、この辺をどう考えたら良いかと思います。

【安藏委員】
私は青少年育成にもかかわっていて、いろいろ行事をやっております。長い経験の中から見ますと、どちらかというと主体的に子どもがかかわるような行事が少ない感じがしています。
育成委員会では、サッカー大会やこどもフェスティバルという行事を取り上げております。サッカーにしても、今はなかなか中学生の参加が難しいということですが、以前は大人がサッカーの審判もやっていました。今は子どもたちの技術も上がっているということもあり、ルールに対してもシビアになってきています。子どものサッカー大会と我々のやるサッカー大会とでは違うだろうということで、中学生に審判を任せて大会を運営してもらっています。
子どもたちは中学生のお兄さんたちがやることに対してはわりあい素直なのですが、応援で保護者がいっぱい来ますと、ちょっとしたジャッジミスでもシビアになってしまいます。そういったことが非常に大変なところでもあるのですけれども、大人が審判をしていたときよりは、少し寛容な部分もありますので、子どもたちにも自信を持って審判の笛を吹くことができるようにフォローをしております。

また、こどもフェスティバルでは、模擬店で焼きそばをつくったりもしています。最初の開会式は全て子どもに任せて、大人はフォローに入るような形で運営をしております。また、それぞれのお店で店長を決めて、小学生がいろいろと売り歩いたり、お客さんを呼び込んだりしています。我々がただ指示するのではなくて、子どもたちが自分たちで企画しながら行う活動が、これからももっと盛り上がっていけば良いと思っています。

【前川区長】
ありがとうございます。
いかがでしょうか。今日は結論を出すわけではないので、ご意見やご質問をいただければそれで十分です。
「たくましく生きていく子どもたちの育成」という議題にしていますけれども、たくましくとはこのようなことだとか、このような教育をしなくてはいけないだとかを決めた途端に、何かおかしくなってしまいます。だからといって、たくましく生きなくて良いかというと、そうでもなく、やはり全員にたくましく生きてもらいたい、その辺の兼ね合いです。定義できないけれども、必要だということです。問題提起型でいくしかないのでしょうか。

今日はいろいろご意見をいただきましたが、もしほかになければ、これで今回の議論は終わりにしたいと思いますけれども、よろしいですか。
私の進行が悪くて、取りとめのない話になってしまい申しわけないのですが、そもそも議題自体にそのような性格があると思います。これからも、また折に触れてこういった機会をつくって、問題提起をしながら考えるという形が良いのかなと思っております。どうかよろしくお願いしたいと思います。

それでは、今日の第２回総合教育会議を終わります。
本日はありがとうございました。

── 了 ──